

豊かな人間性や社会性を育む
異年齢交流活動

揖斐川町立谷汲小学校

谷汲小学校では、令和3年度より、谷汲中学校との「異年齢交流活動」を行っており、今年度までに、異年齢グループでの「なかよし遊び」「掃除交流」「小中合同ひびきあい集会」を行ってきました。

今年度は「相手を思いやる心や言葉遣い」をテーマに活動を行っています。

1学期と2学期は、昼休みを活用して、「なかよし遊び」を行いました。小学生と中学生が混ざったグループを作り、「宝探し」「だるまさんが転んだ」などの簡単なゲームやレクリエーションを楽しみました。中学生がリーダーとなり、ルールを説明したり優しい声をかけたりする姿が見られ、小学生も安心して参加することができました。

遊びを通じて自然な笑顔が広がり、年齢の垣根を越えた温かい雰囲気になりました。また、中学生が率先して良い言葉遣いを示すことで、小学生もそれを見習い、互いに気持ちのよいコミュニケーションが生まれました。

9月には、「小中合同ひびきあい集会」に向けて、相手を思いやる心や言葉遣いについての取組内容を決めました。当時は、スローガン「お互いを大切にし、誰もが安心して暮らせる谷汲の下、各グループの実践を交流したり、生活の中で直面する出来事について話し



生徒の主体性を育む異年齢集団による課題探求学習

揖斐川町立谷汲中学校

谷汲中学校では、「やってみたい」を大切にする総合的な学習の時間を核

合つたりしました。挨拶や丁寧な言葉の大切さを確認し、グループごとに「こんな言葉を遣うと気持ちがいいね」といった意見を出し合いました。



また、事前に、児童会と生徒会の役員が小中合同WEB会議を行い、スマートフォンで活動できるよう、打合せを行っています。児童会のリーダーたちは中学生の進め方を学ぶとともに、意見交流や話し合いの仕方、大切さも学んでいます。

異年齢交流活動の意義は、年長者は

リーダーシップや思いやりを学び、年少者は憧れや安心感を持つて挑戦できるという点にあります。また、こうした関わりは、学校生活だけでなく、社会に出てからも必要な「協力する力」を育てます。異年齢交流活動は、子どもたちにとって新しい発見や刺激を与え、学びの幅を広げる貴重な機会でもあります。今後も、子どもたちが互いに学び合い、成長できることを示すことで、小学生もそれを見習い、互いに気持ちのよいコミュニケーションが生まれました。

9月には、「小中合同ひびきあい集会」に向けて、相手を思いやる心や言葉遣いについての取組内容を決めました。当時は、スローガン「お互いを大切にし、誰もが安心して暮らせる谷汲の下、各グループの実践を交流したり、生活の中で直面する出来事について話し

に、生徒の主体性を育むことに力を入れています。生徒が社会で活躍する10年後は、予測困難な時代を迎えると言われています。そんな時代を生きていくには、自分が直面する問題に対して、何が課題かを見極め、解決に必要な情報を収集・活用し、自ら行動できる「問題解決能力」が必要になります。つまり、受け身ではなく、自ら学ぶ主体性が大切だと言えます。

そうした力を身に付けるために、特に、総合的な学習の時間を充実させています。例えば、本校では、「谷汲地区の活性化」を大きなテーマとし、これを踏まえて、自分が解決してみたいことが、取り組んでみたいことを一人一人が考えます。その上で、同じ方向性の課題をもつ生徒同士でチームを編成し、課題追究を行っています。また、全校生徒45名の小規模校であることを活かし、学年の壁を廃して異年齢で学習を進めています。

課題追究の過程では、実際に地域に出向いて取材をしたり、事業者の方とコラボ商品を考えたりするなど、体験的に取り組んでいます。

地域の皆さんも中学校の活動に理解と協力をしてください。例えば、毎年10月に谷汲観光駐車場で開催される「33フリーマーケット」では、本校の販売ブースを設けてもらい、生徒たちが地域振興のために考えた商品を販売させていただいている。企業とコラボレーションして生み出した「谷汲サイダー」をはじめ、地元のカフェ

の指導を得て作ったクッキー、草木染めを研究し谷汲の草木で染めたハンカチ、生徒チームが考案したトキヤラクターのグッズ等、学習成果の発表として販売させていただ

いています。生徒たちは、実際に販売することを通して、相手に応じて言葉を選んだりすることの必要性や、買ってもらうために分かりやすい説明をしなければならないことを学びました。

このような形態の探究学習を始めて4年目になりますが、総合的な学習の時間を核に育んできた生徒の主体性は、他の場面でも活かされています。特に、生徒会活動では生徒自らが提案する活動が増えました。役員に立候補する生徒は、公約に自分が全校でやつてみたいことを掲げ、実現に向けて取り組みます。

ここ数年で、生徒が発案した活動の例を挙げれば、「地域に向けた夏祭りの開催」「華厳寺門前での被災地支援の募金活動」「世界の難民の子どもも衣服を届ける活動」「読書習慣を身に付けるビブリオバトル」などがあります。これらは、教師からの提案ではなく生徒自らが考え行動した結果、実現した取組であり、生徒は主体的に取り組むことの楽しさも難しさも体験しながら学んでいます。





みんなで考えよう! これからの学校教育の在り方。

学校教育の在り方審議会・地区集会

11月18日から始まった地区集会は、

学校教育の在り方審議会において、学校の適正規模・適正配置および必要な教育環境の整備等に関する意見を広く住民の皆さまから聞かせていただくことを目的に開催しました。会場となるた各小学校区の公民館では、地域の皆さんに参加していただき、様々な意見を見ただくことができています。

- ・少子化が続いているからこそ、子どもたちにはたくさんの方達と出会い、人間関係づくりを学べるよう、学校を一つにしてはどうか。
- ・すべての小学校がクラス替えもできない規模になっている。そのうえ、出生数が町内全体で50人を下回る状況では学校統合もやむを得ないのではないか。
- ・他の自治体では、小規模校を維持しながら、学校間交流を計画的に行うことで少人数の課題を解消している事例もある。
- ・学校は地域「ミニユーニティー」の核でもあり、統合によってそれが失われてしまうのではないか。



かといったご意見をいただくことがで
きていることに感謝します。

学校教育の現状と課題(地区集会)

地区集会では、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の育成と本町の特色ある教育について説明しました。

《確かな学力》「豊かな心」「健やかな体」の育成について

・毎年の「全国学力・学習状況調査」の結果分析によると、児童生徒の多くは、毎日の授業は「楽しくてよく分かる」と好意的に受け止めている一方で、「思考・判断・表現力」の定着に課題があります。



《連携型中高一貫教育》の取組

・県立揖斐高校と町立3中学校が、地域に根差した人材の育成に向けた教育活動を行うなど、将来のキャリア形成の一助となるよう、継続して取り組んでいます。

《本町の特色ある教育について》

・ふるさと教育

・郷土への誇りと愛着を育てようと、児童生徒が生まれ育った身近な地域について学ぶ中で、様々な人との関わりを通して、ものの見方や考え方を広げ、深め、自己を確立させるこ^{とにつなげています。}

《ICTを活用した授業改善》

・タブレットやデジタル教材を効果的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びを両立させる授業を試みるな

ど、更なる学力向上につながる取組を進めています。

《グローバル人材の育成》

・中高生の海外派遣研修、小学生の県外派遣研修などを通して、児童生徒が価値観の異なる様々な人と交流し、多様性が尊重される社会の一員としての資質を養っています。また、ALT 6名を学校に配置して英語でのコミュニケーション活動を楽しみながら表現力を伸ばす学習に力を入れています。

《多様な学びの場》の保障

・中学生を対象にした「立志式」「地域学び塾」「町長と語る会」など、教室での学びとは異なる体験的な学習を行い、自ら学ぶ力や社会参画意識の向上に努めています。

《「コミュニティ・スクール」の導入》

・今年度から各学校に学校運営協議会を設置し、地域の皆さんに、学校運営に積極的に参画していただき、児童生徒の安全確保や学習活動等の一事層充実を図っています。

